

強者の戦略

こんにちは。日本史の岡上です。気がつけば気温も湿度も上がって汗ばむ季節に。いよいよ夏の到来ですね。ところで、私がこの仕事をはじめて10年目の夏を迎えます。受験にとって夏は特別な季節だと毎年のように感じます。何より目の前の生徒の皆さんが目に見えて成長する季節なんですよね。それは学力だけでなく、将来の展望というか、物事の考え方というか、それらすべてが「ぐっ」と前に進む感じ。そんな姿を目の当たりにできるのは、この仕事の醍醐味のひとつなのかもしれませんね。今年もそんな皆さんの助けになれるよう、汗を流しながら講義に臨みたいと意気込んでいます。

さて、「東大日本史のみかた」も4年目に入りました。今年も最新の東大の入試問題を題材にお話をしていきたいと思っています。

今回は「8世紀から10世紀前半にかけての軍事力の構成と性格の変化」についての問題でした。「古代の軍事」について過去の出題をみると、

1999年[1] 7世紀後半の戸籍作成の進展と律令国家の軍事体制の特色

1980年[1] 律令国家の軍団の制度と鎌倉幕府の御家人の制度との比較

がありますので、今回の解答作成の際には、律令国家の軍事（軍団の制）については参考になったかもしれません。しかし、今回の問題は古代の軍事力の構成と性格の「変化」を問う問題で、さらに「8世紀から10世紀前半にかけて」と時代がしっかり設定されているので、丁寧な資料文の読み取りが要求される問題でした。

※ちなみに昨年度の[1]の設問Aも「白村江の戦いに倭から派遣された軍勢の構成について」という軍事に関する出題でしたね。

「軍事」は近年のキーワードなのでしょうか。まあ、これはたまたまだとは思いますが……。

それでは解説を始めていきましょう。

< 8世紀から10世紀前半にかけての

軍事力の構成と性格の変化 >

設問

8世紀から10世紀前半に、政府が動員する軍事力の構成や性格はどのように変化したか。6行以内で説明しなさい。

設問で問われているのは政府が動員する軍事力の構成や性格がどのように変化したか、つまり8世紀から10世紀前半にかけての違いを明確にしなが、時代順にみていかなければなりませんね。

はじめに資料文(1)から。

(1) 740年、大宰少貳藤原広嗣が反乱を起し、豊前・筑前国境の板櫃河^{いたひつ}をはさんで、政府軍約6,000人と広嗣軍約10,000人が戦った。両軍の主力は、すでに確立していた軍団制・兵士制のシステムを利用して動員された兵力であった。

資料文(1)では740年に起こった藤原広嗣の乱を例として、8世紀前半の軍事の状況が書かれています。ここでは、**8世紀の段階で「軍団制・兵士制のシステム」が「すでに確立していた」という点を確認しておきましょう。**

次に資料文(2)です。

(2) 780年の伊治咎麻呂による多賀城襲撃の後、30年以上にわたって政府と蝦夷との間で戦争があいついだ。政府は、坂東諸国などから大規模な兵力をしばしば動員し、陸奥・出羽に派遣した。

資料文(2)では、780年に起こった伊治咎麻呂の乱を例に、8世紀後半の軍事の状況が書かれています。ここでは蝦夷征討のために政府が「30年以上にわたって政府と蝦夷との間で戦争があいついだ」こと、「坂東諸国などから大規模な兵力をしばしば動員」

強者の戦略

したという記述があります。つまり蝦夷征討が大規模化・長期化しており、それに対して政府はすでに確立していた軍団制・兵士制のシステムを利用して対処していたことが読み取れます。

さて、ここで一旦まとめておきましょう。資料文(1)(2)から8世紀の軍事の状況は、軍団制・兵士制のシステムがすでに確立しており、それが政府によって反乱の鎮圧や蝦夷の征伐（広い意味では外征）に使用されていたとなります。しかし、今回の問題で問われているのは「軍事力の構成と性格」ですので、ここでいう「軍団制・兵士制のシステム」とはどんなものかをはっきりさせておく必要があります。ここは資料文では説明されていないので、教科書の知識で補うしかありません。律令体制下の「軍団制・兵士制のシステム」といえば、

- ・律令国家が作成した戸籍が基盤となっている。
- ・成年男子（正丁）3～4人に1人の割合で徴発される。
- ・諸国の軍団に編入され、訓練を受ける。

と、このあたりを指摘することができればいいと思います。それでは、先に進みましょう。

(3) 783年、政府は坂東諸国に対し、有位者の子、郡司の子弟などから国ごとに軍士500～1,000人を選抜して訓練するように命じ、軍事動員に備える体制をとらせた。一方で792年、陸奥・出羽・佐渡と西海道諸国を除いて軍団・兵士を廃止した。

資料文(3)は8世紀末の状況ですが、軍事力の構成や性格に変化がみられます。まず、それまでのように政府が一元的に軍を動員するのではなく、「国ごとに軍士500～1,000人を選抜」することが命じられています。また、軍士として徴発される対象も「有位者の子、郡司の子弟など」から選抜され、集められた軍士は国ごとに訓練が施され、軍事動員に備え

る体制をとるよう命じられたとあります。

つまり資料文(1)(2)と比較してみると、政府が公的に徴発し、訓練を行い、軍事動員がかけられたという点では共通していますが、資料文(1)(2)の「軍団制・兵士制のシステム」が戸籍に登録された成年男子（正丁）を軍事の基盤としているのに対し、資料文(3)では「有位者の子、郡司の子弟など」といったある一定の地位以上にある人々を対象としたシステムである点に違いがあります。

では、何故このような変化が起こったのでしょうか。資料文(3)では、「一方で792年、陸奥・出羽・佐渡と西海道諸国を除いて軍団・兵士を廃止した」との記述があり、ここで「健児の制」を思い浮かべた人も多いのではないのでしょうか。しかし、ここで変化の理由を「健児の制」の採用の結果としてはいけませんよ（そもそも時系列が合いませんね）。ちなみに『詳説日本史研究』（山川出版社）では「健児の制」についての記述は以下のようになっていました。

（桓武天皇は）対外的緊張のゆるみもあって、東北の陸奥・出羽や九州の地を除いて、従来の兵役による兵士の質の低下などで行き詰まっていた軍団兵士を廃止して、健児の制を設けた。律令に基づく軍団制は、正丁3～4人に1人の割合で兵士を徴発して軍団で訓練させるものであったが、農民に大きな負担となり、役立たない状況ともなっていたので、郡司の子弟や有力農民から志願により少数精鋭の健児を採用した。健児には国の大小や軍事的必要に応じて国ごとに20～200人までの人数を定め、60日交替で国府の警備や国内の治安維持にあたらせたものである。

つまり、資料文(3)の内容と「健児の制」とでは目的も規模も異なります。ということは、あくまで8世紀末の軍事力の構成と性格の変化は資料文(3)の内容から類推するしかありません。

強者の戦略

資料文(3)では「国ごとに軍士 500～1,000 人を選抜」とありますが、これが以前の「軍団制・兵士制のシステム」に取って代わるものとは考えにくいでしょう。例えば、坂東諸国を 8 カ国と考えると全部で 4000～8000 人の動員が考えられますが、この動員数は資料文(1)から考えて突発的な反乱の鎮圧には使用できても、資料文(2)にあるような長期化・大規模化した軍事動員には対応できないものと考えられます。そう考えると、資料文(3)の措置はあくまで「軍団制・兵士制のシステム」を残しながら、それを補強するものとして採られたものだといえるでしょう。ちなみに、この時設けられた軍士については、政府がその設置を命じたとはいえ、**国ごとに選抜され訓練されたことから、指揮・動員は国司、もしくは地方豪族に依拠していた**ことも類推できますね。

そして、資料文(3)の後半部分「陸奥・出羽・佐渡と西海道諸国を除いて軍団・兵士を廃止した」という記述の読み取り方としては、「健児の制」への切り替えに注目するのではなく、**全国一律的な軍事力の構成から、国ごとの実態に合わせて柔軟に軍事力を構成するように制度的な変更が行われていったこと**に注目するべきでしょう。

それでは、最後に資料文(4)に進みましょう。

(4) 939 年、平将門は常陸・下野・上野の国府を襲撃し、坂東諸国の大半を制圧した。平貞盛・藤原秀郷らは、政府からの命令に応じて自らの兵力を率いて将門と合戦し、これを倒した。

資料文(4)では 10 世紀前半の軍事力の構成や性格について言及されています。それまでと大きく異なっていることは一目瞭然ですね。

それまでの軍事力が政府主導によって選抜・訓練・動員される状況から、資料文(4)では平貞盛・藤原秀郷といった地方に土着化した中下級貴族（後に武家と呼ばれる人々）が、反乱（＝承平・天慶の乱）の発生に対して「自らの兵力」、つまり私的に構成さ

れた軍事力を率いて鎮圧を行っています。軍事力の構成が政府主導から私的なものに移っていった背景には、10 世紀初めの律令国家体制の崩壊があることは言うまでもないでしょう。

以上をまとめて、解答を作成します。

【解答例】

8 世紀の律令体制下、政府は戸籍を基盤に公民を徴発し軍事力を構成する軍団制・兵士制を採用していた。8 世紀末、蝦夷征討が大規模化・長期化すると、関東では国司・地方豪族に依拠した公民に限定されない軍事力の構成が行われる一方、辺境地以外の軍団・兵士は廃止された。10 世紀前半には、地方に土着化した中下級貴族らが私的に軍事力を構成し、それを政府が動員する体制へと変化した。(180 字)

さて、いつものように論述問題の解答はもちろん一つではありません。「これはどうだろうか?」「これではだめなのか?」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。**この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。**

それでは次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに!!